

「アメリカで何をつかみとりたいか。私の夢」

北海道別海高等学校 普通科第1学年 藤波 めぐみ

私の将来の夢は医者になることです。そのために私はアメリカに行き、幅広い視野を持ち、患者の心に寄り添い、「あなたに会えてよかった」と患者に思ってもらえる人になりたいです。

このように思うようになったきっかけは私の一番の宝物である家族が病気になったことです。私の家庭は、母子家庭で、私と働く母の事を気遣い面倒を見てくれたのは祖母でした。その恩返しもできないまま祖母は私が小学四年生のとき他界しました。

祖母が糖尿病で入院したある日、「喉が渇くから炭酸が飲みたい」と言いました。私は良かれと思って、このくらいの量なら大丈夫、問題ないと病棟にいる看護師に見つからないようにコソコソとオロナミンCをお見舞いの度に届けていました。透析の意味も水分管理が大切であることも祖母が亡くなった後に理解し、病気を悪化させた一因であることを知りました。そして、初めて死が身近に起きた衝撃、反省、やり直しができない恐ろしさを実感しました。

また、私が保育所に通っているときに母は乳がんになりました。治療のため髪が抜け、胸には傷痕、四歳の私には風呂場で大量の毛を手を持つ母が怖かったです。怖がる娘を見た母も泣いていました。

小学三年生の時、母の乳がんが再発し、一か月以上札幌の大きな病院で入院することが決まりました。私は一人っ子で父もいなかったのが近所の方の家に預けられました。近所の方は、私が寂しくならないようにと私の家からわざわざ布団を運んでくれたり、自由研究を一緒にやってくれたりしました。そして、その家にいた私の一つ上の年の子と一つ年下の子は本当の兄弟のように接してくれました。赤の他人である私を温かく迎え入れてくれたことに感謝しかありません。ですが、それと同時に私はもっと自立しなくてはならないと感じました。

中学二年生の時、母が再び入院しました。私は約一か月間、自分の家で一人で過ごしました。バドミントンの全道大会の準備や、洗濯などいつも母に頼っていたことを自分の力で乗り切ることができたので、少しは自立できていると思いました。それでも、毎日のご飯を届けてくれる母の上司の方や、塾に送り迎えしてくれた方、他にもたくさんの方に助けられました。

完治しないなら抗がん剤治療を受けないという弱気な母に叱咤激励してくれた看護師に出会い治療に専念し、現在も闘病中で、車椅子生活になり不自由にはなりましたが不幸ではありません。

患者に寄り添いました、その家族への気遣いができる人になりたいです。このような経験から医療の仕事に興味がでてきました。

以前、根室市の三群医師会の取組に「お医者さんの仕事を知ろう」という企画があり参加してきました。

三人くらいのチームになり各科を見学していくものでした。心臓にカテーテルを入

れてバルーンで血管をひろげたりする体験、鶏肉を電気メスで切る体験、救命救急の体験、血液の病理検査の話などを聞いたりしました。

先生方は休日に、何もわからない子供に無償で説明してくれました。それには根室市は人口に対して医者が不足しているので医者になって戻ってきてほしいという願いがあったからなのです。

私は、日本という狭い枠から出てアメリカで実体験を通して様々な知識を持っている人たちと出会い、刺激を受け、自己の知識を高め、これらの沢山の経験をして心の引き出しをたくさんもった医者になりたいと思ったのです。今現在母の担当医のように「あなたに会えてよかった」と、たとえ完治できなくても患者に、そう思ってもらえる人でありたいです。

幸せとは心で感じるものです。人とのつながりを通して、得られるのが心です。大切なことは今ここに生きているという幸せに気付くことだと思います。私は家族によって培われた部分が大きいですが、友人、周りの方々に恵まれ精神的に豊かだと感じます。

私は無知の恐ろしさを実感したからこそ気付き、アメリカで困難にチャレンジすることで知識を高め、進化していきたいです。何かに挑戦すると心が前向きになるはず。全力でなりたい自分になれるように努力したいです。そして、LAで実際に自分が見て学んだことを持ち帰って、少子高齢化を背景に「住み慣れた地域で最後まで自分らしく暮らしたい」という人々の願いを支える担い手となり社会に貢献したいです。